

万葉集の夕占の歌

序

「うらなひ」のウラは表に対する裏、心をさす。ナヒはその行為をする意の接尾語ナフである。「うらなふ(占ふ)」「あきなふ(商ふ)」「うべなふ(諾ふ)」「になふ(担ふ)」など、いずれも語の成り立ちは同じで、そのことをすることを内容とする。占いは普段の生活からは直接には知ることができない、事の成否・吉凶について、事物の兆しや現象を通して神意としてそれらをうかがう行為である。

万葉集においても占いは俗信の一つに数えられ、各種の占いが歌の素材として詠み込まれている。概要は先行研究によつて整理されているが、一例として櫻井満編修『万葉集要

菊地義裕

覧』「社会・民俗篇」の「占」の項を見ると、万葉集において確認できる占いとして、「足占(あうら・あしうら)」「(4・七三六、12・三〇〇六)、「石占(いしうら)」「(3・四二〇)、「卜象焼き(かたやき)」「(14・三三七四、15・三六九四、16・三八一一)、「路往占(みちゆきうら)」「(11・二五〇七)、「水占(みなうら)」「(17・四〇二八)、「夕占(ゆふけ)」「(3・四二〇、4・七三六、11・二五〇六、二六一三、二六二五、二六八六、13・三三二八(ゆううら)、14・三四六九、16・三八一一、17・三九七八)が挙げられている。また「卜象焼き(かたやき)」の項では、「カタ(兆)は神の意志によつて現われることの意味」とし、鹿の肩甲骨を用いる「太占(鹿卜)」と亀の甲を用いる「亀卜」とを挙げて整理している。

万葉集に見られる占いは古代社会に機能した占いの一部であるが、歌数のうえからは「夕占」（「ゆふけ」九例、「ゆふうら」二例）を詠んだ歌が最も多く、身近な占いとして生活に機能していたことがうかがわれる。用例は延べ十一例で、挽歌の一例（3・四二〇）を除くと、他は恋歌で占められている。^(注)夕占の担い手は男女それぞれであり、恋愛の実際にかかわって、その局面においては男女間で違いのあることが予想される。それぞれになぜ夕占を行うのか、言い換えれば、どのようなときにそれは行われるのか、本稿では万葉集の俗信研究の一環として「夕占」を取り上げ、男女の恋愛生活において「夕占」がどのように位置づけられるのか考察したい。

一 夕占の作法

はじめに夕占がどのように行われたのか整理したい。巻十一の一首には夕占が次のように歌われる。

言霊の八十の衢に夕占問ふ 占正に告る 妹相寄らむと

(二五〇六)

この歌からは夕占が夕方「衢」で行われたことが知られる。チ

マタは道股の意で、道が交錯する辻をさす。巻十六の長歌にも「……百足らず 八十の衢に 夕占にも 占にもそ問ふ……」（三八一一）と歌われる。ユフケの表記においても「夕占」と記した例が一例（3・四二〇）見られる。夕占は衢で行われるものであったらしい。また、巻十三の長歌には、「……玉梓の 道に出で立ち 夕占を 我が問ひしかば 夕占の 我に告らく……」（三三二八）とあり、「道に出で立」つての行為としても歌われる。

『拾遺和歌集』の巻十三（恋三）にも「人麿」の歌として、まさしてふ八十のちまたに夕占問ふ 占まさにせよ 妹に逢ふべく

(八〇六)

の一首がある。これは先に記した万葉集巻十一の歌の異伝と考えられる歌である。一首では「八十のちまた」が占いが当たる確かな空間として歌われ、そこでの「夕占」で「占まさにせよ」と、よい内容が確実に出ることが期待されている。この歌は『人麿集』（中巻、恋部、四〇〇番歌）にも収められており、万葉集以後も伝承され、人口に膾炙した歌であったと見られる。下って藤原家隆の歌を収める、鎌倉時代初期の『壬

二集』にも「怨恋」の題のもとに、

玉銚のみち行人にゆふけとふことのはをさへ恨みてぞゆ
く
(一五二二)

の一首があり、「玉銚のみち行人にゆふけとふ」と表現される。これらの歌によると、夕占は夕方辻に立って道行く人のことばで占うもので、時代を超えて長く日本の社会に伝えられた卜占行為であったことが知られる。

史料に目を向けると、藤原清輔によって記された十二世紀中頃の歌学書である『袋草紙』には、上巻「誦文の歌」の項に、

夕食を問ふ歌、私、夕卦の占のことなり。

ふなとさへゆふけのかみにもとはばみちゆくひとよ
うらまさにせよ

とあり、夕占の対象が「ふなとさへゆふけのかみ」と表現される。「ふなとさへ」は、

「ふなと」は「岐」で道の神、「さへ」は「塞へ」で道祖神^(注4)

と注されるように、道の神をさしての称である。要は道の神

を祭り、その神意を道を行き交う人のことばで知ると理解されていたことがわかる。

同様の歌は、「基本的な部分は平安時代末期の成立」とされる^(注5)、有職故実書の『簾中抄』にも伝えられる^(注6)。

ゆふけとふうた　ふなとさへゆふけの神にもとへハ
みち行く人にうらまさしかれ

三度此歌をとなへてうちまきをしてくしのはを三度ならしてすくる人のいふ事をき、てよしあしを志る

『袋草紙』の歌と比べて、歌詞に若干の違いが見られ、「も」とはば」が「も」とへハ」、「みちゆくひとよ」が「みち行く人に」となっている。文脈上は『袋草紙』の方が適切である。結句も「うらまさにせよ」が「うらまさしかれ」となっている。どちらも占いが的中することを念じた表現であり、夕占の歌として伝承されるなかで変化したものであろう。また『簾中抄』には、この歌を、①三度唱える、②うちまきをする、③櫛の歯を三度鳴らす、④過ぐる人の言うことを聞いて良し悪しを判断する、というように、その作法が合わせて記されている。このうち、②のうちまき（打撒）は悪神を払うため

に米をまき散らす散米の行為である。

同様のことは十二世紀末の建久年間の成立とされる百科全書、『二中歴』の「咒術歴」の項にも見え、次のように記される。^(注)

○夕食問時誦 妙善王 金着女 追杖鬼 参尾王 波羅八王

布奈止左倍由不介乃加美爾毛乃止八々美知由久比止與宇良末左爾世與

説云、三度誦此歌作堺散米、鳴櫛齒三、後堺内來人、若屋内人言語聞天知吉凶

唱える歌は『袋草紙』と同様であり、その時の所作は『簾中抄』とほぼ同じである。『二中歴』でもこの歌を三度唱えるとするが、その後、堺を作つて散米し、櫛の齒を三度鳴らした後に堺の内に來た人、または屋内の人の言語を聞いて吉凶を知るという。

また『二中歴』より成立年代が下る、百科全書の『拾芥抄』には、

問夕食歌

フケトサヤ。ユフケノ神ニ。物トエハ。道行人ヨ。ウ

ラマサニセヨ

兒女子云。持黃楊櫛。女三人。向三辻問之。又午歳女。午日間之（云云）。

今案。三度誦此歌。作堺散米。鳴櫛齒三度後。堺内來人答。爲内人。言語聞。推吉凶。

とあり、歌は、「フナトサヘ」の誤りと考えられる初句を除くと、三句目の「物トエハ」が『簾中抄』と同じ、^(注)他は『袋草紙』『二中歴』と同じになっている。また『拾芥抄』では、子や女子が唱えること、黄楊の櫛を持つて女三人が三辻に向かつて問うこと、午歳の女が午の日に問うことが記され、他には見られない独自の記事となっている。またその一方で、「今案」として『二中歴』同様その場での所作のことが記されてもいる。

時代が下つて新たに祭祀的要素が加わることは十分に考えられるが、『二中歴』以前、平安・鎌倉期までを視野に和歌、歌学書・有職故実書の伝えを見ると、夕占のあり方は大きくは変化していないように思われる。これらの資料を踏まえて伴信友『正卜考』は、

この占を、由布氣といふは、夕に衢に出て、往来人の言を聴て、その言をもて神教として、占問ふ事に合せ判断する術にて

と整理したが、夕占はこうした内容を基本的な形態として継承されてきたものであろう。

もつとも、万葉集では「八十の衢」や「玉梓の道」に限らず、「……門に出で立ち 夕占問ひ 足占をそせし……」（4・七三六）、「……下恋に 思ひうらぶれ 門に立ち 夕占問ひ つつ……」（17・三九七八）というように、「門」に立って夕占をする例も見られる。信友はこの点にも触れて、

かならず衢に出て、ものするにはあらで、家の門にまれ、いづくにまれ、所にしたがひて、往来の繁きところを求めて問ふわざなるべし

と説いた。また「道行き占」（路往占）を詠んだ、次の一首、玉梓の道行き占の占正に 妹は逢はむと 我に告りつる

（11・二五〇七）

に触れて、

夕トにはあらざれど、道を行ながら、往来の人の語をも

て占へたるにて、占問ふ事は、これも同じかるべしとした。

夕占・道行き占ともに往来の人のことばを神の示教と受け止め、そのことばに事の真実を見るのである。道行き占も恋愛にかかわり、「妹は逢はむと我に告りつる」と女性のもとへの通いを内容とするから、それが行われる時間は通いを前にした夕方であろう。夕占にしても道行き占にしてもそれらが夕方行われるのは、池田弥三郎・横山聡が説くように、夕方は人間の時間である昼から神々の時間である夜へと推移する境の時間であり、とりわけ恋愛・婚姻が、神の時間の営みとして女のもとへの男の通いを内容とするからであろう。^(注10) 恋の成就を神に祈願する生活が基本としてあり、^(注11) そうしたなかでの神の時間における通いゆえに、その成否・吉凶には人知を超えた神の示教が求められるのである。

二 女の夕占

夕占は意のままにならない恋の状況と不可分にかかわり、むしろそれを前提とするものと考えられる。『時代別国語大辞

典上代編』（三省堂）は「恋ふ」を説明して次のように記す。

思い慕う。眼前にないものに心惹かれることをいう。特に異性を思う場合に用いられることが多く、通常、格助詞ニに導かれる文節を受ける。相似た意味を表わすことのある思フが、ヲを受けるのと対照的である。

要点とするとところは、「恋」は「眼前にないものに心惹かれる」状態であること、また格助詞ニに導かれて「〜恋ふ」の形態で用いられることである。万葉集の恋歌に注意すると、「恋ふ」状態に触れた次のような歌が見られる。

A. 岩根踏む重なる山はあらねども 逢はぬ日まねみ恋ひ渡るかも
(11・二四二二)

B. 遠山に霞たなびきいや遠に妹が目見ねば我恋ひにけり
(11・二四二六)

C. ぬばたまの夢にはもとな相見れど 直にあらねば恋止まずけり
(17・三九八〇)

Aでは逢わない日が多いので恋し続けることが、Bでも長い間「妹」と直接逢えないために恋い焦がれることが歌われる。またCでは夢では逢うけれども直接ではないので恋しさ

が止まらないことが歌われる。逢いたくても逢えない状態にあること、それが「恋ふ」ということであることがわかる。その思いは自身ではどうすることもできない、相手ゆえの思いであり、そこに相手の存在を前提にした「〜恋ふ」の表現も生まれることになる。

男女間の夕占も、こうした相手中心の恋愛観を前提になされたものと考えられる。男性は女性の、女性は男性の状況を前提とするのであり、一言に夕占とは言っても、置かれている状況によって男女間でその目的とするところには差が生じるといえよう。夕占の性格を明らかにするために、ここでは用例を男女別に分けて整理し、考察したい。^(注1)

はじめに「女の夕占」に注目すると、用例中それに該当するのは次の七例である。

1. 夕占にも占にも告れる今夜だに 来まさぬ君をいつと
か待たむ
(11・二六一三)

2. 夕占問ふ我が袖に置く白露を 君に見せむと取れば消
につつ
(11・二六八六)

3. 紀伊の国の 浜に寄るといふ 鮑玉 拾はむと言ひて

妹の山 背の山越えて 行きし君 いつ来まさむと

(17・三九七八)

玉梓の 道に出で立ち 夕占を 我が問ひしかば 夕

6. さにつらふ 君が御言と 玉梓の 使ひも来ねば 思

占の 我に告らく 我妹子や 汝が待つ君は 沖つ波

ひ病む 我が身一つそ ちはやぶる 神にもな負ほせ

来寄る白玉 辺つ波の 寄する白玉 求むとそ 君が

占部据ゑ 亀もな焼きそ 恋しくに 痛き我が身そ

来まさぬ 拾ふとそ 君は来まさぬ 久ならば いま

いちしろく 身にしみ通り むら肝の 心碎けて 死

七日だみ 早からば いま二日だみ あらむとそ 君

なむ命 にはかになりぬ 今更に 君か我を呼ぶた

は聞こしし な恋ひそ我妹 (13・三三一八)

らちねの 母の命か 百足らず 八十の衝に 夕占に

4. 夕占にも今夜と告らろ 我が背なはあぜそも今夜よし

も 占にもそ問ふ 死ぬべき我が故 (16・三八一一)

ろ来まさぬ (14・三四六九)

反歌

5. ……近くあらば 帰りにだにも うち行きて 妹が手

7. 占部をも八十の衝も占問へど 君を相見むたどき知ら

枕 さし交へて 寝ても来ましを 玉梓の 道はし遠

ずも (16・三八一一)

く 関さへに 隔りてあれこそ よしゑやし よしは

1は卷十一の「正述心緒」の一首。夕占でも他の占いでも

あらむそ ほととぎす 来鳴かむ月に いつしかも

来ると告げられた今夜さえおいでにならないあなた、そのあ

早くなりなむ 卯の花の にほへる山を よそのみも

なたをいつと思つて待てばよいのかの意。また2は同じ卷十

振り放け見つつ 近江道に い行き乗り立ち あをに

一の「寄物陳思」の一首で、夕占で袖に置いた白露をあなた

よし 奈良の我家に ぬえ鳥の うら嘆けしつつ 下

に見せたいことを詠んだものである。どちらも夕占をして待

恋に 思ひうらぶれ 門に立ち 夕占問ひつつ 我を

つ、その女の立場での歌であり、感慨である。3は卷十三の

待つと 寝すらむ妹を 逢ひてはや見む

「問答」の歌で、長反歌全体五首から成る歌群中の長歌である。

この歌の場合、二回所出する「夕占」はともにユフウラとよむ。内容は「紀伊の国の浜に寄るといふ鮑玉」を拾おうとして出かけた「君」がいつ帰って来るのか、道に立って夕占で問い尋ねたというものである。「夕占を我が問ひしかば 夕占の我に告らく」と、夕占によって現れた内容を語る形態をとっているが、行き交う人がそうしたことまで語るとは考えにく

いから、夕占を神の託宣の機会ととらえて待つ恋を演出した文芸的な歌と見られる。4は巻十四の東歌の一首で、夕占に今夜来ると出た「わが背」が来ないことをなぜといぶかしんだ歌である。待つ立場での歌であり、内容は1の歌と同じである。5は、大伴家持の、天平十九年（七四七）三月二十日の夜の作で、長反歌五首から成る「恋緒を述ぶる歌」の長歌である。時に家持は越中守の任にあり、都に残してきた妻の坂上大嬢への恋情を吐露したものである。長歌では現実に出ることがないので恋しさが幾重にも重なっていること、また近くにいたならば妻と手枕を交わして寝ても来ようが、道が遠く関で隔てられているからどうにもならないことが述べられ、ホトトギスが鳴く月に早くなつてほしいと、その月への

期待が歌われる。これは五月に家持が正税帳使として都に上ることが予定されていたからである。家持は近江路を経て「奈良の我家」に至り着いて早く妻に逢いたいと歌う。そして待つ妻のようすを「門に立ち夕占問ひつつ」と、門で夕占をしながら待つその姿として描出する。妻の姿を想像してのものはいえ、むしろそれだけに、この描出は典型的な（女の夕占）の景として評価できよう。

最後の6・7の長反歌は、題詞に「夫君に恋ふる歌」と記される巻十六の由縁ある歌の一つである。左注に記される由縁には、ある時車持氏のおとめがいた。その夫が年久しく通つて来なかつたのでおとめは心を痛め、病氣となつて日増しに瘦せて死にそうになった。そこで使いを遣つて夫を呼び寄せ、涙を流しながらこの歌を口ずさみ亡くなったという。長歌では自身のことを「思ひ病む我が身一つそ」と歌い、そうなたたことを「ちはやぶる神にもな負ほせ 占部据ゑ亀もな焼きそ」と、神のせいにもしないほしい、また卜部を呼んで亀の甲を焼いて占うこともしないほしいという。そして「死なむ命にはかになりぬ」と、死にそうになったことを歌い、

「八十の衢」で今更「夕占にも占にもそ問ふ」のは君なのか、母なのかと問いかけた内容である。

夕占を行う主体に妻以外が想定され、またそれが誰なのか明確ではないから、この歌を「女の夕占」の例としてここで扱うことには問題があるが、反歌では長歌を受けて「占部をも八十の衢も占問へど」と、亀卜・夕占で神意を尋ねるけれども、「君を相見むたどき知らずも」と、君に逢う手立てがわからないと歌われる。由縁を基にすると、病気のおとめのもとに夫は来ているのだから、反歌の「君を相見むたどき知らずも」の表現とは齟齬することになる。ただし、一首を由縁とは無縁な独立した歌と見ると、この場合の夕占も「君」に逢えない状況のなかで、「君」との出会いを求めての占いということになる。

この長歌と反歌とは齟齬する内容となっている。夕占の目的も長反歌で同じとはいえない。長歌の場合は危篤のおとめを前にしての占いであり、「占部据ゑ亀もな焼きそ」同様、回復の方策を求めて神意を問う占いということになる。夕占で病気の原因を問うといったことがないとはいえないから、

それはそれで認めてよいであろうが、恋愛にかかわって問題となるのは出会いの方であり、女の夕占としては反歌の「君を相見むたどき知らずも」の表現の方が注目される。

このように七首の夕占の歌を見ると、6の例以外は夫の来訪や帰宅にかかわって妻が行う夕占となっている。これらの場合、夫と妻は周囲も認める関係であり、これは通いが恒常化している婚姻段階と考えられる。それゆえに夫がいつ来るかということが関心事となるのである。婚姻の展開を互いに名を尋ねる「名乗り」の段階、知り合った男女が求愛を重ねるヨバヒの段階、周囲も認める関係となつて通いを重ねる妻問いの段階に分けると、女が夕占を行うその時は通いが恒常化している妻問いの段階と見ることができる。

三 男の夕占

次に男が行う夕占に注目したい。その例として挙げられるのは卷十一の二五〇六番歌、卷四の七三六番歌の二例である。卷十一の歌は先にも引用した「言霊の八十の衢に夕占問ふ」の一首である。衢で夕占をして「妹相寄らむ」という結果が

出たというもので、恋の成就の予見を内容とする。先に引用した道行き占の場合も、「妹は逢はむと我に告りつる」(11・二五〇七)とあり、内容が類似する。これらはともに通いが始まる以前の、恋愛の初期の段階でのものである。

また巻四の歌は、大伴家持と坂上大嬢との間で取り交わされた全体十四首から成る歌群中の一首である*(の歌)。一首の位置、内容を明らかにするために歌群全体を掲出する。

大伴宿禰家持、坂上家の大嬢に贈る歌二首 離絶数年、
また逢ひて相聞往来す

忘れ草我が下紐に付けたれど 醜の醜草言にしありけり

(七二七)

人もなき国もあらぬか 我妹子と携ひ行きてたぐひて居らむ

(七二八)

大伴坂上大嬢、大伴宿禰家持に贈る歌三首

玉ならば手にも巻かむを うつせみの世の人なれば手に

巻き難し

(七二九)

逢はむ夜はいつもあらむを なにすとかその夕逢ひて言の繁きよ

(七三〇)

我が名はも千名の五百名に立ちぬとも 君が名立たば惜しみこそ泣け

(七三一)

また大伴宿禰家持が和ふる歌三首

今しはし名の惜しけくも我はなし 妹によりては千度立つとも

(七三二)

うつせみの世やも二行く なにすとか妹に逢はずて我がひとり寝む

(七三三)

我が思ひかくてあらずは玉にもが まこと妹が手に巻かれむを

(七三四)

同坂上大嬢、家持に贈る歌一首

春日山霞たなびき心ぐく照れる月夜にひとりかも寝む

(七三五)

また家持、坂上大嬢に和ふる歌一首

*月夜には門に出で立ち夕占問ひ足占をせせし 行かまく

を欲り

(七三六)

同大嬢、家持に贈る歌二首

かにかくに人は言ふとも 若狭道の後瀬の山の後も逢はむ君

(七三七)

世の中の苦しきものにありけらし 恋にあへずて死ぬべき思へば (七三八)

また家持、坂上大嬢に和ふる歌二首

後瀬山後も逢はむと思へこそ 死ぬべきものを今日までも生けれ (七三九)

言のみを後も逢はむとねもころに我を頼めて逢はざらむかも (七四〇)

冒頭の題詞には「離絶数年、また逢ひて相聞往来す」の注が付されている。「離絶数年」のち再び相聞往来したというのであり、その年については天平十一年(七三九)頃とみるのが通説である。夕占を詠む七三六番歌は二組目の贈答で家持が大嬢の贈歌に答えた歌である。大嬢が月がぼんやりと照っている夜に心晴れず一人寂しく寝ることかと嘆いたのに対して、家持はあなたのもとに行きたいと思つて、月の晩には夕占をし足占をしたと応じている。諸注釈において家持が占いを詠む必然性に言及するものは見られないが、窪田空穂『萬葉集評釈』(第三卷)が「二人の事情は、正にさういふことをする必要があつたのである」(七三六の【評】)と記して

おり注意される。歌群の一首として歌われるだけの必然性があると見るべきであろう。

あらためて一首に注目すると、夕占とともに足占が歌われる。足占は万葉集ではもう一例、次の歌に見られる。

月夜良み門に出で立ち足占して行く時さへや妹に逢はざらむ (12・三〇〇六)

家持の歌同様この歌も「妹」のもとへの通いにかかわつて歌われる。「月夜良み門に出で立ち足占して」の表現は家持の歌と重なり、類型的な表現である。類似の恋歌がほかにもあつたのであろう。足占については注釈書の多くが伴信友の『正卜考』の見解を引用するが、『必携万葉集要覧』には諸説が次のように整理される。

- ① あらかじめ定めた地点まで、吉凶のことばをいいながら歩き、そこに至つたことばにより判断する法(正卜考)、
 - ② 定めた地点までの歩数の奇数・偶数によつて占う法(全註釈)、
 - ③ 定めた地点に至つたときの足の左右で判断する(大系本)、
 - ④ 通行人の足の響きの強弱で判定する法(折口信夫)。
- 足占が中国伝来のものであるなら、②の場合は

奇数が吉、偶数を凶としたであろう。また、古典では左上位であるから、③は左足がついたら吉、右足がついたら凶と判断したか。

諸説のいづれとも定めがたいが、二首の用例では「月夜には門に出で立ち」（七三六）、「月夜良み門に出で立ち」（三〇〇六）と、「月夜」が特定される。万葉集には「月夜」を詠んだ歌が多く見られるが、それらの歌には明るい月明かりのもとの男女の出会いを詠んだ歌が伝わる。

ア・大伴の見つとは言はじ あかねさし照れる月夜に直に逢へりとも
（4・五六五、賀茂女王）

イ・月詠の光に來ませ あしひきの山きへなりて遠からなくに
（4・六七〇、湯原王）

ウ・ぬばたまのその夜の月夜今日までに我は忘れず 間なくし思へば
（4・七〇二、河内百枝娘子）

エ・闇ならばうべも來まさじ 梅の花咲ける月夜に出でまさじとや
（8・一四五二、紀女郎）

オ・月夜良み妹に逢はむと直道から我は來つれど夜そ更けにける
（11・二六一八）

カ・今夜の有明の月夜ありつつも君をおきては待つ人もなし
（11・二六七二）

アでは「照れる月夜」に直接逢ったとしても「見つ」見たとは言わないといい、イでは山を隔てて遠いわけではないから月明かりのなかおいでくださいと、來訪を促している。ウは河内百枝娘子が家持に贈った歌で、出会った「その夜の月夜」が今日まで忘れられないことが歌われる。またエでは「闇」の夜なら來ないのももつともだと言いつつ、「梅の花」が咲いている「月夜」に來ないのかと、強く訪れを促している。万葉集には同様に、「月夜」に橘の花をともしること（8・一五〇七、一五〇八）、梅の花をともしること（10・二三四九）を詠んだ歌も見られる。オ・カは卷十一の「正述心緒」「寄物陳思」の歌で、オでは月がよいので「妹」に逢おうと近道をしてきたと歌い、カでは「今夜の有明の月夜」を次句の「あり」を起こす序詞として据え、月明かりのもと一途に「君」の訪れを待つことが歌われる。

これらの歌からうかがわれるように、月の明るい晩は男が女のもとに通うには適した状況であったといえる。足占の二

首が「月夜」にかかわって歌われるのはこのためと考えられる。しかし巻十二の歌では、「行く時さへや妹に逢はざらむ」と、わざわざ足占をして出かけたにもかかわらず「妹」に逢えないことが嘆かれている。「足占」にしても「夕占」にしても、男の場合は相手の女性の状況とは無関係にそれらは行われるのである。これは通いが恒常化している段階ではなく、それ以前の段階であり、恋の障害などが想定される段階ということになる。それゆえ、出かけて逢えるかどうか、恋が成就するかどうか、その点が関心事となるのだと考えられる。

家持の場合も「行かまくを欲り」、夕占をし足占をしたとわざわざ歌うのであるから、これらの夕占・足占の行為も来訪の不安や恋の障害を前提に歌われ、歌群内に位置づけられているとみなければならぬだろう。この点に注意して歌群の歌を見ると、家持から大嬢への贈歌二首（七二七・七二八）のあと、大嬢から家持への贈歌、家持の「和する歌」の組み合わせが三組続く。最初の贈答（七二九〜七三二、七三二〜七三四）はそれぞれ三首から成り、大嬢の歌では、一首目（七二九）であなたが玉であれば手に巻き付けるのにこの世の人

であるからそれができないと歌い、二首目（七三〇）では逢う夜はいつでもあるのにどうしてあの晩に逢ってこんなにも噂がひどいのかと歌う。そして三首目（七三一）では、私の名はいくら立っても構わないがあなたの名が立つのが惜しいと嘆く。一方家持の「和する歌」では、一首目（七三二）であなたのためならどんなに浮き名が立っても構わないと言い、二首目（七三三）ではこの世が二度とはないのでどうして独り寝するのかと嘆く。そして三首目（七三四）では、こんな思いをしないでいつそあなたに巻かれる玉でありたいと歌う。従来指摘されるように、これらの歌は対応の関係にある。まず、家持を玉に見立てる七二九と七三四が対応し、名が立つことを厭わないとする七三一と七三二が対応する。また噂（人言）への嘆きを内容とする七三〇「なにすとかその夕逢ひて言の繁きも」と、一度限りの現世への自覚のもと独り寝への嘆きを内容とする七三三「なにすとか妹に逢はずて我がひとり寝む」が対応する。続く二組目の贈答における大嬢の「心ぐく照れる月夜にひとりかも寝む」（七三五）の思いも本来二人で過ごすべき「月夜」に一人いることへの嘆きであり、先

行する贈答の七三三、家持の「なにと妹に逢はずて我がひとり寝む」と呼応しての嘆きと解される。

歌群中に家持・大嬢の独り寝の嘆きの原因を求めれば、「なにとかその夕逢ひて言の繁きも」(七三〇)がそれに当たり、恋の障害である「人言」への憚り・嘆きと考えられる。浮き名を話題にする七三一・七三二、人言を問題にする七三七もこの点にかかわってのことである。小野寺静子は「家持と大嬢の再会後の贈答歌群には「人言」「人目」を嘆くものが多い」とし、

人の噂や人の目は、たとえば身分の相違など不適な婚姻のみならず、家持、大嬢というふさわしい相手同志の場合にも、かまびすしく、さどく、当事者には恐怖であった。いいかえれば「人言」や「人目」を厭う二人にこそ現実の恋、あるいは現実をふまえた恋があつたのだといえる。

といい、「離絶以前と目される家持・大嬢の二人の相聞往来歌」には、「一例も「人言」「人目」が見出されない」ことを指摘している。^(注4)

「人言」への憚り・嘆きはこの歌群の特質といつてよいものである。この歌群に神意を問う夕占・足占といった占いの歌が持ち込まれなければならなかったのはこの点に基因してのことと考えられる。そしてその結果は直接には歌われないが、展開から行くことが憚られるものであったことがわかる。三組目の贈答の一首目、大嬢の七三七番歌で「かにかくに人は言ふとも」と、先行歌との脈絡が定かではないままに「人言」に言及するのは、夕占・足占の内容を「人言」の弊害を示唆したものと解してのことである。

「行かまくを欲り」夕占・足占をしたという七三六番歌は、「照れる月夜」に独り寝ることを嘆く大嬢への言い訳のごとく解されるが、「言の繁き」(七三〇)ことに對する家持のもどかしさの表明であり、夕占・足占による神意の確認を経て、歌群は「後も逢はむ」(大嬢・七三七、家持・七三九、七四〇)という先々への互いの思いを確認し、展開することになる。その意味でこの占いの一首は、歌群の前半を受けて後半へと展開させる繋ぎの役目を果たしていると考えられる。歌群の展開上、この夕占・足占は行われる必然性があり、そ

れは恋の障害である「人言」を前提に通いの成否をめぐってということになる。このように男の夕占は通いが恒常化する以前、恋愛の初期段階で恋の成就（11・250六）や通いの成否（4・七三六）にかかわってそれを占うべくなされたものと見られる。

結

万葉集において夕占は恋情表現の一翼を担うものとして表現される。それを表現に即して〈男の夕占〉〈女の夕占〉と分けた場合、そこに性差による型があるのではないか、というのが本稿の主旨である。

夕占はどちらの場合も直面する恋の行方がはかりがたい、定めがたいという状況下で行われる。その状況を男女別に見ると、女の場合は待つ恋の反映といえる。夫が来るか来ないか、それを案じて夕占によって知ることであり、当事者の感慨としても、恋歌における待つ者の景としても歌われる。こうした女の夕占は、通いが恒常化した妻問いの段階での行為と理解される。

これに対して男の場合は、恋の行方にかかわるもの、通いの成否にかかわるものに分けられる。通いが恒常化していればわざわざ占いをする必要はないから、これは通いが恒常化する以前の段階で、何らかの恋の障害が想定できる段階である。それは妻問い以前の、いわゆるヨバヒの段階と考えられる。このように夕占の習俗においては、男女間でそれを言う「時」と「理由」を異にしていたと考えられる。

婚姻の展開を踏まえて、夕占が行われる段階を自覚的にとらえることによって万葉集の恋歌はよりの確に理解できるのではないか。巻四の家持の夕占・足占の歌の考察はその点にかかわるものである。

本稿が分析した男の夕占の枠取りをもって巻四の大嬢と家持の贈答歌群を見ると、家持の占いはこの歌群に纏綿する人言への嘆きを踏まえてのことと理解され、それが「月夜」ゆえに、通いのために「門に出で立ち」、行われたのだとすると、この行為は大嬢を思うがゆえのこととして歌群に位置づけることができる。そしてそれは同時に、「人言」への対峙の契機ともなり、「後も逢はむ」という先々への強い意欲を導くこと

にもなっていると解される。家持の夕占・足占は、この歌群が人言への嘆きを基調とするがゆえに持ち込まれ、歌群に文芸的な深まりと展開とをもたらしていると考えられる。

本稿は万葉集に歌われた「夕占」の民俗を体系的にとらえ、そこから作品をとらえ直すという方法に基づく分析である。こうした視座と方法は先師による、万葉集研究における「万葉民俗学」の有効性の提唱を継承してのものである。この分野の可能性についてはいくつかの事例分析を通して別に論じたことがある^(注16)。合わせて参観いただければ幸いである。

注

- (1) 伴信友「正卜考」(『伴信友全集 第二卷』内外印刷、一九〇七年)、西村真次『万葉集の文化史的研究』(東京堂、増訂版一九九四年)などが先駆的論考。金子武雄『上代の呪的信仰』(新塔社、一九六八年)、櫻井満「古代の占い」(『万葉びとの世界―民俗と文化―』雄山閣、一九九二年、初出一九八八年)、三谷栄一「古代文学と卜占」(『国文学 解釈と鑑賞』第五三卷一〇号、一九八八年九月)。
- (2) 西村真次『万葉集の文化史的研究』は、この他に「琴占」(9・

一七七三)、「夢占」(17・四〇一一)、「山菅占」(12・二八六二)、「苗占」(14・三四一八)を立項する。括弧内は掲出の関係歌。

(3) 「夕占」の用語例は「ゆふけ」九例、「ゆふうら」二例(同一歌)合わせて十首十一例であるが、巻十六の反歌三八一二番歌の「占」も長歌三八一一を受けて「夕占」を内容とする。よって「夕占」を詠み込む歌は全体で十一首である。

(4) 新日本古典文学大系『袋草紙』上巻「誦文の歌」脚注。『袋草紙』本文も同大系本による。なお、チマタの性格を分析した論考に和田萃「夕占と道饗祭」(『日本古代の儀礼と祭祀・信仰中』塙書房、一九九五年)がある。

(5) 掲出の各書の成立については加藤友康・由井正臣編『日本史文献解題辞典』(吉川弘文館)による。各書についての執筆は『袋草紙』藤岡忠実氏、『簾中抄』倉本一宏氏、『二中歴』拾芥抄』山田英雄氏。

(6) 『簾中抄』の引用は近藤瓶城編『改定史籍集覧第二三冊』(近藤活版所、一九〇一年)による。

(7) 『二中歴』の引用は近藤瓶城編『改定史籍集覧第二三冊』(近藤活版所、一九〇一年)による。

(8) 『拾芥抄』の引用は故実叢書編集部編『改訂増補故実叢書二二卷 禁秘抄考註・拾芥抄』(明治図書、一九九三年)による。

(9) 故実叢書本の頭注に「〇エ一本作ハ」とあり、『袋草紙』三

中歴』同様「物トハハ」とする本のあることが注記される。

(10) 池田弥三郎『日本文学の素材』（日本放送出版協会、一九八八年）、横山聡「万葉びとの恋―卜占を中心に―」（『武蔵野日本文学』第一号、二〇〇二年三月）。

(11) 万葉集には男女が恋の成就にかかわって「神の社」を日ごと祈ることを詠んだ歌がある。「夜並べて君を来ませとちはやぶる神の社を祈まぬ日はなし」（11・266〇）、「我妹子にまたも逢はむとちはやぶる神の社を祈まぬ日はなし」（11・266六二）。一首目の女の歌では「夜並べて」君の来ることが、二首目の男の歌では「我妹子」に引き続き逢うことが祈願される。婚姻においても占いによって神意がうかがわれるのは、基本的には神への祈願、神の加護によって生活の秩序が得られているからである。

(12) 夕占の歌には、卷十一に、「逢はなくに夕占を問ふと幣に置くに我が衣手はまたそ繼ぐべき」（二六・二五）がある。この歌は夕占で供物として袖を手向けるために衣の袖をまた繼がなければならぬと詠んだものである。「逢はなくに」とあり、夕占で出合いの可否などを尋ねたものであるうが、逢えない状況はもとより多様であり、この歌については男女いづれにも考えられる。また卷三挽歌部の「石田王の卒る時に、丹生王の作る歌」には、夕占が「……天雲のそくへの極み 天地の 至れるまでに 杖つきも つかずも行きて 夕占問ひ

石占もちて 我がやどに みもろを立てて……」（四二〇）と歌われる。挽歌であるうえに「夕占」の文脈が明確ではない。以上の点からこれら二首については、以下の考察では触れないことにする。ただし論旨に影響はない。

(13) 天平十一年（七三九）六月に家持の妾が亡くなり（3・四六二〜四七四）、同年八月〜九月の時期に大伴家の「竹田庄」で家持・坂上郎女・大嬢の交流（8・一六一九〜一六二〇）がうかがわれ、家持・大嬢の相聞歌の往来も見られることによる（8・一六二四〜一六二六）。なお、妾の他界を天平八年（七三六）頃と見、再会を天平九年頃と見る見解もある（伊藤博『万葉集の歌人と作品下』塙書房）。

(14) 小野寺静子「大伴家持と坂上大嬢」（『万葉集を学ぶ 第三集』有斐閣、一九七八年三月）。

(15) 櫻井満「万葉集の民俗学」（『万葉集の民俗学的研究』おうふう、一九九五年）。

(16) 拙稿「万葉集と万葉民俗学」（『日本文学論究』第七四冊、二〇一五年三月）。

